
我愛羅の話

かいと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

我愛羅の話

【Nコード】

N5398P

【作者名】

かいと

【あらすじ】

NARUTOの我愛羅が試験終了後、帰還してからの話。

※以前サイトに掲載していた話を推敲し投稿しています。

『風影』と呼ばれる、偉大なる里の忍が、先日命を落とした。

広大な砂漠に位置する砂の里は、一週間、朝日が昇り月が沈むまで朝昼晩も嘆き倒し、そうしてようやく、街角にすすり泣きが響くことも無くなった。

けれど市場には活気もなく、よどんだ空気が里中に満ちて砂漠へと溢れていくようだった。

里は、中心となるべき『影』の選考がまだ終わらず、ただ慌ただしく過ごしていた。

十
十
十

木の葉の里で行われた、中忍試験が終わり。

我愛羅と、その姉兄であるテマリとカンクロウが里へ戻ってから、数日が経った。

テマリとカンクロウはそれぞれに任務を得て少しずつ家を空けるようになったが、我愛羅への依頼は全く無い。

理由は、近付きたがる者が姉と兄の他にいないためだった。

その、里の住人からのあからさまな態度を気にした様子もなく、我愛羅は一人、あてもなく外出する日々を送っている。

テマリが少しばかり心配しようが、カンクロウが慌てようが彼には関係ない。

砂を焦がすように照りつける太陽が昇っている中で、その日も我愛羅は一人で家を出た。

茹だる気温の中を直線的に歩く。目的もない足取りはそう速いも

のでもなく、我愛羅の姿はすぐに人々の目に止まった。

ある者は街角で、ある者は物陰で、彼らは眉を寄せて、我愛羅を横目に睨む。遊んでいた子供達も、親に呼ばれるままに道から隠れた。

「おい、見ろよ、我愛羅だ」

「あんな化け物が『風影』様のご子息だなんて……！」

「『風影』様の葬儀にも出席はしなかったぞ」

「帰ってこなければ良かったのに！」

「厳しい任務だったんじゃないのか？ どうして生きてるんだ」

小声で悪意が囁かれる。

ほんの数ヶ月前ならば、無言の脅しで封じていたその囁きを、我愛羅は黙殺した。

過去に感じていたような苛立ちなど、もう我愛羅の心には浮かばないからだ。

何の反応も返さない我愛羅へと、不意に礫が投げられる。

それは我愛羅へと触れる前に、彼が背負ったひょうたんから流れ出た砂によって弾かれ、乾いた地に落ちた。

直接的な攻撃に、我愛羅の足が止まる。

彼が視線を動かすと、女性が慌てた様子で我が子を抱えていた。

片手に石を持っている子供の様子に、我愛羅は己を攻撃してきた人間が誰であるかを正しく理解する。

視線を向けてくる我愛羅を、子供が睨んだ。

「あいつ化け物なんでしょ？ ぼくがやっつけてやる！」

「馬鹿！ 止めなさい！」

子供の幼い言葉を遮って、血の気の引いた顔の女性が腕に力を込める。怯えているのだろう。

仕方のないことか、と、それを眺めながら我愛羅は思う。

中忍試験へ向かう前の我愛羅なら、今、あの子供は全身を砂で押し潰されて息絶えていたに違いないのだ。

ただひたすらに、我愛羅の自愛の為だけに。

「……………」

今、我愛羅がそうしないのは、ただ単に、その必要性が無いからだ。

赤い髪の少年はゆっくりと親子から目を逸らし、そして歩みを再開させる。

戸惑ったような視線がその背中に放たれたが、すぐにそれも消えた。

それを気に留めることもなく、我愛羅はゆっくりと里を歩く。

その足は自然と里はずれの墓地へ向かい、やがて彼がそこへ辿り着いた時、空は茜色に染まり始めていた。

墓参りの者は他にも数人居たが、全員が彼の姿を認めた途端に墓地から出て行ってしまい、墓地に佇むのは今、我愛羅一人だった。

砂の地では珍しい大輪の花々を手向けられた、他の墓石の群れとは離れた位置に作られた大きな墓が、我愛羅の目の前にある。

墓石の表には文字が彫り込まれていた。

それは、我愛羅が里を離れている間に砂漠の片隅で死んでしまった、『風影』の名を持っていた男の名前だった。

そしてその名前は、墓石の前に佇む少年の父親の物でもあった。任務と中忍試験の為に里を離れていた彼と彼の姉兄達は、父親の

亡骸すら目にしていない。

話を聞いた時にはすでに葬儀も終わっていて、我愛羅も、テマリもカンクロウも、父の死に顔を見送る事すら出来なかった。

「……久しぶりだな」

我愛羅は、ぽつりと、墓石へと囁く。

少年の瞳には、里の人々とは違い、嘆きや悲しみなど映ってはいなかった。

とても幼い頃、彼にとってその石の下に眠る男は最高の忍だった。恐らく、砂の里の者達にとっては今でもそうだろう。

けれども、我愛羅が己の額に『愛』と刻んでから、少年の中にあつた父親への憧れやその他の感情は、その全てが消え失せていた。

「お前には、結局、殆ど何も教わらなかった」

我愛羅は更に呟いた。

時折里で見かけた、父親と子供の姿を思い描く。

例えば手裏剣の投げ方を、術の編み方を、チャクラの使い方を、何かの教えを請い、請われるままに与えているその姿を思い出す。

そんな関係など、彼と彼の父親の間には無かった。

顔を合わせることもそう多くは無かったし、今になって思えば避けられていたのだろうということも、今の我愛羅は気付いている。

『風影』は、我愛羅にはほとんど何も教えてはくれなかった。

我愛羅が父に強制的に教育されたのは、己だけを第一とした生き延び方だけだった。

「……俺が知っているのは、生き延びる術だけだ」

砂の里には、茶釜に封じられた妖魔が居た。

妖魔、というところ少し語弊があるかも知れない。元は、それは老僧の生き霊だった。

力を蓄え知性を得たそれは、『守鶴』と呼ばれ、嚴重に封印されていた。

本来なら、塵となって消えるまで、それは封じられたままである筈だった。

それを解いたのは、その時二人の子を持つ親であり、やがて生まれる三人目を妻に身籠もらせた『風影』だった。

生まれる前の我が子に『守鶴』を取り憑かせ、人ではありえない程の力を持った御しやすい兵器を造る為に、彼はその封印を解いた。そうして、母親の命と引き替えに、この世にその子供は生まれ出た。

けれども、兵器としてはあまりに幼かった子供の心は不安定で、操ることなど出来なかった。

だからこそ『風影』は、間違えて作り上げた玩具を破壊するがごとく、息子を殺すために刺客を送り続けた。

例えば道でのすれ違いざまに、夜寝台で横たわった瞬間に、心を許した相手にすら、我愛羅はその手から刃を向けられた。

その全ては『風影』の命令だった。

「ずっと、それだけだった」

我愛羅は、ゆっくりと呟く。

我愛羅の名前は、彼の母親が付けた。

『我のみを愛する修羅であれ』

母親は、死の淵で呪うようにそう囁いてその名を我が子に与えた。己以外を憎めと、命ずるように。

そうさせたのは、少年の前で土の中に眠る『風影』だ。

何人も何人も、父の差し向けた刺客は我愛羅に忍び寄った。

そして、その全てを我愛羅は殺した。

後悔などしていない。殺さなければ、死んでいたのは彼だったからだ。

ほんの数ヶ月前まで、我愛羅にとって世界の全ては、彼が殺すための生き物で溢れた場所だった。

誰にも必要とされていない自分という存在を、そこにあるのだと確かめることが出来るのは、我愛羅が誰かを殺した時だけだった。

だから我愛羅は『己のみを愛す』意味として額に文字を刻み、全てを憎み、闇に怯えていた。

木の葉の里でうずまきナルトに出逢うまで、そのままだった。

もしもナルトに会わなければ、ずっと、そのままだっただろう。

まったく同じ境遇の、自分と違う道を歩いていた存在を見つけた時、我愛羅は、自分の選択で全てを変えることが出来ると学んだのだ。

誰にも愛されていないという認識が、ただの思い込みだったことも。

そうして初めて、我愛羅は憎しみの無い場所へと放り出された。

それは、とても、喜ばしい事だった。

喜ばしい筈、だった。

「……なあ、『風影』」

身勝手だった父親を父とも名前でも呼ぶことが出来ずに、我愛羅は囁く。

「俺は、これから、どうすれば良い？」

人を殺すことしかできなかった少年は。

方向も分からない雪原で途方に暮れる旅人のような目をして、た

だ、空が完全な夜色になるまで墓標を見つめ続けた。

けれど、答えは無かった。

十
十
十

帰宅した我愛羅は、ぼんやりと前を見据えたまま、ただ長椅子に座っていた。

彼の姉が好んで購入してきたそれは柔らかく、体を預けるには最適だ。

椅子の横には、彼がいつも背負っているひょうたんが立てかけられている。

「我愛羅？」

首を傾げながら、テマリが弟の側へと近寄ってくる。

いつも背負っている巨大扇子は壁に立てかけてあり、先程までやっていた皿洗いももう終了したようだった。

カンクロウは既に自室へと引っ込んでいて、居間には我愛羅とテマリの二人だけだ。

テマリの手が我愛羅の傍にかかり、そのまま彼女は弟の隣へと腰掛ける。

「今日は何処に行ったんだ？ 散歩？」

姉の問いに頷いて答え、我愛羅はテマリの手元を見やった。そこ

には、数枚の紙が握られている。

視線に気付いたテマリが、それをひらひらと振って見せた。

「ん？ コレ？ コレはね、任務表だよ。今週の分」

どうやら彼女は、逐次任務を貰いに行くのではなく、一週間分をあらかじめ請け負ってからやっているらしい。

任務が記されたそれを我愛羅へと見せ、順番にめぐりながら、テマリの声が簡単に任務の内容を読み上げた。

低級ランクの任務達は、ペットの散歩や組み手の相手、捜し物や家事手伝いと多岐に渡っている。

それを見せられるまま眺めていた我愛羅が、ふとテマリの手を押さえた。

「……コレは？」

「え？ ああ。人捜し」

訊ねられて、テマリが任務の概要を口にする。

「最近、ちょっと出てるんだ。子供の行方不明者なんだけど」

「子供？」

「そう。下は五つから……上は、そうだね、我愛羅くらいまで」

里を抜けたのか、さらわれたのか、それすら手がかりはないと言う。

「上忍中忍は外の仕事にかり出されているんだ」

こういうのは普通そろそろ上が本腰を入れるのだけれど、今は『風影』選考でごたごたしているから、とりあえずはと下のランクへ回ってきているらしい。

そう説明したテマリの手が、任務を記した紙達を折りたたむ。

「我愛羅も気をつけてね」

姉に言われて、我愛羅が軽く眉を上げた。

「俺がどうにかされると思ってるのか？」

思わず言えば、そんなことは無いよ、と苦笑が返る。

その後で笑みを消したテマリが、真剣な瞳で我愛羅を見つめた。

「ただ……里の人に、気をつけて」

「里の？」

何故、と訊ねかけて、ああ、と我愛羅は納得の声を漏らした。

我愛羅は異端だ。里の者は常に警戒している。

この件と関係があると、言い掛かりを付ける者が現れるかも知れない。

「だから、気をつけてね」

優しくテマリが言う。

それを聞いてから頷いた我愛羅は、ふと何かを思いついたようにぱちりと瞬きをして、それからそのまま立ち上がった。

それを見て目を丸くしたテマリが、その目で彼を見上げた。

「我愛羅？」

「少し出掛ける」

言い置くと、我愛羅は傍らに置いていたひょうたんを一瞥し、けれど手は伸ばさずに歩き出した。

「持って行かないの？」

いつもの装備をせずに部屋を出て行こうとする弟へ、テマリが戸惑ったように問いかける。そのひょうたんの中には、我愛羅を守る砂が入っているのだ。

我愛羅は答える様子も無く、すたすたと足を動かしていく。

「もう遅いから、早く帰って来てよ？」

背中にテマリが声を掛けると、我愛羅は振り返りもせずに軽く頷いたようだった。

そのまま彼は居間を出て行って、テマリがたった一人でその場に取残される。

「我愛羅……？」

弟の急な行動に首を傾げながら、テマリは我愛羅を見送った。

少年が一人、暗くて細い路地を歩いていた。

もう太陽も沈んだというのに日除けの布を頭から被っていて、誰かを捜すようにきよろきよろと周囲を見回している。

その背後に、大柄な男が現れた。

少年はそれに気付いた様子もなく、被った薄い布の中から前方を気にしている。

その顔へ、男の大きな掌が、昏倒薬をたつぷりと染みこませた布を宛がった。

少年は酷く驚き抗ったが、ものの数秒で体を弛緩させて、かくりと意識を失う。。

まだ月も昇らない薄暗い路地で、にたりと笑った男の手が子供を抱え上げ、そのまま彼はその場から素早く立ち去ってしまった。

十十十

「カンクロウ、我愛羅は？」

夜も更けてきた頃。

湯浴みを終えたテマリが、濡れた髪を布で擦りながら、自室で寛いでいた弟へと訊ねた。

「まだ戻ってないのか？」

ずっと弄っていた己の人形から目を離し、カンクロウは目を丸く

する。

「そう、何処にも居ないみたいなんだ」

テマリは答えて、どうしよう、と眉を寄せた。

「大丈夫、我愛羅は強いじゃん」

心配そうな姉へと言って、カンクロウは軽く微笑む。

「……それも、そうだね」

不安そうにしながら、それでも頷いたテマリが、落ち着かない様子で弟の部屋を出る。

それを見送ってから、やれやれ、とカンクロウは溜息を一つ吐いた。

どうもこの家の姉君は、弟に対して少しばかり過保護だ。特に我愛羅には。

けれどそれも仕方ないのかも知れない、と心の中で打ち消しながら、少年は手を伸ばし、『カラス』の胴体を布で拭いた。

我愛羅は化け物を飼っている。

我愛羅を喰い殺そうと狙うアレがいつ我愛羅を殺してしまうかなんて、誰にも分からない。

そこまで考えて、カンクロウの手の動きが止まる。

ちゅちゅちゅ、と時計の針が時を刻む部屋の中で、ぎゅうつと眉間に皺を寄せた彼が、少しばかり床を滑って移動して、廊下の方へと近付いた。

部屋から身を乗り出すようにして廊下を見やれば、気配を感じていた通り、廊下に佇んだままのテマリの背中が見える。

「……あんまり遅いようなら、二人で探しにくじゃん？」

彼が部屋からそう声を掛けると、振り返った彼女は頷いた。

十
十
十

「しかし、今日は二人もいけたぜ。ついてるなあ」

「静かにしろ。ガキが目を覚ますぞ」

「目を覚ましたって逃げられしねえよ」

「そりゃあそうだがな」

「だろう？」

下品な笑い声を上げて、男達の足音が遠ざかっていく。

それが聞こえなくなるのを待ってから、彼はゆっくりと目を開いた。

目の前には薄暗い闇があり、どうにか己の影が見える、といった状態だった。

「……ねえ、だいじょうぶ？」

ふと、幼い声が彼へと問い掛ける。先客が居たようだ。

どうも聞いたことのある声だなと思いながら彼が起き上がると、

影で分かったのか、その声は言った。

「だめだよ、すっごくきつくしばってるんだ。はずれないよ」

声の主も、必死で逃げようとしたのだろう。絶望の滲んだ声は涙を孕んでいて、諦めを響かせる。

とても幼い子供が捕まっているようだ、と彼は眉を潜める。

そして、自分の状況を確認した。

昏倒させたと思わせるために、ずっと目を閉じていた。

その上、途中から布にくるまれてしまい、方向感覚も怪しくなってしまったが、どうやらここは砂の里の外らしい。

彼が横たえられたのは砂の上だった。

手は後ろで括られ、足も束ねられている。しかもご丁寧に忍び封じの縛りだ。

彼は少し身動きして縄に弛みが無いのを確認した後、指先で砂に触れた。

少しチャクラをこめれば、簡単に砂は彼の支配下に落ちる。

印すら結ぶことなく操った砂粒が、縄を擦り出す。

細かな石達はやがて少年の手足の縄を擦り切り、本来あるべき場所へと戻った。

「え？ うそ、なわはずれたの？」

立ち上がった影を見て、幼い声が驚いて声を上げる。

彼は屈み、声の主を座らせた。

触れた体はやはり幼く、そして冷えていた。テントを張っているとはいえ、砂漠の夜だ。仕方ないことだろう。

手探りで少年の手を見つけ、そこを縛っている縄を解く。

足も解いてやると、少年は嬉しそうに立ち上がった。

「やった、ありがとう！」

「……静かに」

僅かに高い声をたしなめれば、ごめんなさい、と慌てて己の口を覆う。

「すぐに帰れるから、大人しくしていろ」

彼は言って、少年の肩を掴んで座らせた。

素直に従った少年が頷き、その目で影だけの相手を見つめる。

「おにいさん、とってもつよいひと？」

「……ああ」

問いに、少しだけ考えて彼は答えた。

ここで『いいや』と否定して、少年を無駄に不安がらせることはない。

彼の答えに気をよくした少年は、もう一度訊ねる。

「すなのさとの化け物よりつよい？」

「……」

その言葉に、この少年と何処で会ったのかを思い出して、彼は押し黙った。

その沈黙を何と解釈したのか、ごめんなさい、と少年は謝る。
その頭に手を置いて、彼はゆっくりと答えた。

「そいつとは、まあ同等だ」

「ほんとに？　すごい！」

恐らく目を輝かせているだろう、声高く少年が言って、静かに、と彼はもう一度たしなめた。

それから、そっと、少年の顔に手を乗せる。

「少しだけ目を瞑って待っている。すぐ終わらせてくる」

彼が囁くと、はい、と少年は素直に目を閉じた。

幼い動きに目を細めながら、彼は、テントから外へと出る。

外の輝きで一瞬彼の顔が照らされたが、少年は言い付け通り目を閉じていたので、それは見えないままテントはまた閉ざされた。

テントの外で、彼は周囲を見回した。

月明かりに照らされた赤い髪と、黒く深い隈のある両目、いつもは背負っているひょうたんを欠いた姿が、砂の上に影を落とす。

彼、我愛羅が居たテントの他にも幾つかテントがあり、その向こうに焚き火の明かりが見えた。

下品な笑い声も聞こえるから、人さらい共はそこで談笑だか酒盛りだかをしているようだ。

小さく笑い、我愛羅はそちらへと足を向けた。

足音を消す努力すらせずに、まっすぐに灯りの近くへと向かう。

そこでは、男が4人、太い笑い声を上げながら何かを話していた。手には酒瓶があり、酒気を帯びた顔は赤い。

そんなに清潔でもない身なりで、我愛羅は彼らがなんなのか理解した。

砂漠に巣くう盗賊一味だ。

『風影』という統率者を亡くした砂の里を、好機とばかりに狙ってきたらしい。

腹の底が、小さく焼けつく。

我愛羅は眉を潜め、苛立ちを込めて口を開いた。

「おい、貴様ら」

十十十

野太い叫び声が聞こえたので、少年は驚いて目を開けた。

今の声は外からのようだ。

もしかして、先程のお兄さんの声だろうか？

慌てて、テントから顔を出す。

声はずっと向こうからだった。

少年はテントを抜け出し、声のしたほうへと駆ける。

あのお兄さんは無事だろうか。

頭を撫でてくれた手は大きく、優しそうだったけれど、彼もまだ

子供の部類だった筈だ。

大きな男の人達に殴られたりしてないだろうか。

縄を解いてくれたお札に少しだけ加勢するつもりで少年は駆け、

一番端のテントの影から、そっとそこを覗いて。

そして、息を止めた。

そこには、たった一人しか立っていなかった。

少し赤い斑点で彩られた、その人一人。

少年を攫った男達は、何処にも居ない。代わりに、赤く染められた砂の山が四つあるだけだ。

その人が、少年の気配に気付いたのか振り返る。

その顔を、少年は知っていた。

よく少年の母親が言い聞かせている名前しか、分からなかったけれど。

「すなのさとの……化け物？」

そう呼ばれても、その人は怒らず、ただ少し、目を細めた。

月明かりの下、紅色の雫で少し体を濡らしたその人は、恐ろしいほど綺麗で、強い生き物に見えた。

十
十
十

「我愛羅が帰って来ない!!」

堪えきれず絶叫したテマリが、そのまま背に巨大扇子を背負った。それに気付いたカンクロウも、ひょいと『カラス』を背負う。

「じゃあ、そろそろ探しにいくじゃん？」

「あたりまえだ!!」

落ち着かせようと軽く言った言葉も全力で肯定されて、カンクロウは目を瞬かせた。

過保護な姉が苛立ったように顔をしかめながら、上の弟へと背を向けて、大股歩きで部屋を出て行く。

「あ、おいテマリ」

待てよと呼びかけてその後ろに続きながら、カンクロウは訊ねた。

「あてはあるじゃん？」

「無い！」

きっぱりと言い放って、テマリの手が扉を壊しそうな勢いで開く。ばたん、と音を立てて壁へぶつかり、跳ね返ってきた扉を、後続したカンクロウがそっと押し開ける。

「いつも我愛羅は、何処に散歩に行ってるかも言わないから……！」

外に出てすぐに足を止めたテマリが、きょろりと周囲に目をやる。南と北へ続く一本の道を、どちらへ向かうか考えているようだ。

「じゃあ二手に別れるじゃん。見つけたら笛でも……」

合図を決めて別れようと言い掛けたカンクロウの口が、途中で止まった。

それを不審に思っただの顔を見やったテマリは、カンクロウが口を開けたまま呆然と一方を見ているのに気付く。

それに少しだけ目を丸くしてから、弟の視線を追いかけたテマリも、同じ方向を見やる。

里を囲む壁の、一番近い方だった。

「……！」

それを見て、テマリは眼を見開いた。

里を砂嵐から守る高い壁の、その向こう。

彼方から、まるで津波のように、砂が押し寄せていた。

誰が何のためにあんな事をしたのか知れないが、その高さは里の囲いを軽く超えている。あの砂津波が里へ来たら、一体何人が生き埋めになるだろうか。

慌てて、二人は駆け出した。

「テマリ、お前の風で何とかするじゃん！」

「一人分のチャクラじゃ全然足りないだろ！」

怒鳴り合いながら、眠りに付いていた民家の傍を駆け抜ける。

風のような速さの走り方をアカデミーでは習っていたけれど、それでも間に合うかどうか怪しいものだった。

そうしてようやく二人が里の壁へと辿り着いた時、既に数人の忍達が壁の上に立ち、砂を止めようとチャクラを練っている所だった。これだけ人数が居ればどうにかなるだろう、と、カンクロウは一人ほっと肩の力を抜く。

己も他と同じく砂津波を食い止めようとチャクラを練りだした弟の傍で、ふと気付いたテマリが声を上げた。

「カンクロウ、待て！」

耳の傍の大声に、カンクロウが慌ててテマリの顔を見る。

「どうした!？」

「見ろ、あれ……!」

言って呆然とテマリが見つめるのは、遙かに高く音を立てながら
迫り来る砂津波の頂点。

言われて目を向けたカンクロウも、次の瞬間に目を見開いた。

「……そんな……我愛羅!？」

カンクロウの声が聞こえたのか、忍達も顔を上げた。

そして、その場の全員が、迫り来る砂の上に立つその影を見る。

砂を操り、まっすぐに里へと近付いて来ているその人影。

それは間違いなく、『風影』の息子の一人、我愛羅だった。

ざざざと音を立てていた巨大な砂津波が、ゆっくりとその動き
を止める。

やがてそのまま下から崩れ出し、その高度をゆっくりと下げ出し
た。頂点に居た我愛羅が、それに合わせて姉と兄の前まで降りてく
る。

我愛羅の表情が伺える高さになって初めて、テマリとカンクロウ
は、我愛羅の後ろにいる奇妙な光景を見ることが出来た。

「……我愛羅……?」

「……それ、どうしたんじゃん……?」

『風影』の次男の後ろでは、子供達が数人、寝転んで寝息を立て
ていた。

全員、手首や足首に哀れな縄擦れを起こしているが、それ以外は
無傷のようだ。

驚いて問い掛けの顔をする姉兄に、我愛羅はただ平然と、連れて
きた、と答えた。

攫われた子供らを、化け物を宿した少年が助けた。

その事実には、その場にいた忍達の間に動揺が走る。

そんな大人達を視界の端で捕らえながら、我愛羅は砂を手繰り、
ゆっくりと里の中へ子供らを降ろした。

騒ぎを聞きつけ集まってきた里の者達の内、降ろされた子供達の
親が数人、声を上げて我が子へ駆け寄る。

その様子を見てから、我愛羅の目がテマリとカンクロウへ向いた。

「ところで、こんな所で何をしているんだ？」

常なら家でゆっくり体を休めている筈の姉兄が里の外れの壁まで
やって来ているという事に、軽く首を傾げる。

そんな弟に苦笑して、カンクロウが肩を竦めた。

「お前が砂津波なんか作るから、慌てて出てきたじゃん」

「……運ぶのに一番楽だったんだ」

我愛羅が呟き、ふいと兄から顔を逸らした。

それからゆっくりと歩き出した彼を、テマリとカンクロウが追いかける。

「……おい、待て！」

そうして家路へ付こうとした三人を、鋭い声音が止めた。

足を止めて振り向けば、我愛羅を睨み付ける男の視線がそれを迎える。

「何だ」

「お前が、こいつらを拐かしたんじゃないのか!？」

我愛羅を睨んだまま、男が言う。

大人の愚かさに、テマリの眉が顰められた。

けれど言葉を向けられた我愛羅の顔は、何も変わらない。いつも通りの表情だった。

そのまま、我愛羅が答える。

「俺はそんな事はしない」

「は！ どうだかな」

別の男が嘲笑うかのように言って、数人の忍達が三人を囲んだ。いつもなら自動的に我愛羅を守る砂の入ったひょうたんも、今の場には無い。

痛めつけるなら今だと思ったのかも知れない。

カンクロウが溜息を吐きながら背中の人形へと手をやったのを、その弟が手を伸ばして制した。

「俺が攫っても何の利益も無いだろう」

冷静な声が、我愛羅の口から漏れる。

「お前は里を憎んでいる筈だ!」

「復讐したいんだろう!」

「この化け物が！」

罵るように的外れなことを叫ぶ大人を、我愛羅の視線が緩やかに撫でた。

その口が溜息を一つ零す。

そして、彼は踵を返して歩き出した。

それを見て、テマリとカンクロウも先ほどと同じようにその後を追う。

「おい！ 逃げるのか！？」

背後から罵るような声が飛んでも、我愛羅はもう振り向かなかった。

十十十

騒ぎから一夜が明けた。

テマリとカンクロウが任務の為に家を出てから、我愛羅は椅子から立ち上がり、そして家を出た。

それは、連日と同様の散歩では無い。

我愛羅の足は真っ直ぐと、里の上層部がひたすら無駄に話し合っている大きな建物へと向いていた。

建物へ入り、中を歩いていた一般人や忍が驚いた顔をするのも気に留めず、その足は会議室へと進む。

そして扉を開け、老人達がああでもないこうでもない話し合っていた様子を一瞥してから、静まり返った彼らへ向かって口を開い

た。

「俺が、『風影』の名を貰い受ける」

言い放った言葉は乾いた空気に酷く響き、驚いた様子の老人達がざわめく。

あの呪われた子が？ 穢れた血が？ と漏れ聞える言葉に、我愛羅は眉を寄せた。

「黙れ」

囁く声を低くすれば、ざわめきはぴたりと止まる。

「俺は風影の息子だ。俺以上に資格がある者が居ると言うのなら、そいつを連れて来い」

我愛羅の言葉に、沈黙したまま老人達は顔を見合わせた。その内の一人が立ち上がり、その視線を我愛羅へ向ける。

「何故、『風影』となる」

訊ねられた言葉に、我愛羅ははっきりと答えた。

「強者が里を守るが道理だ」

「何故、守る」

何故、と繰り返す老人の傍で、座っていた老婆も立ち上がった。

「お前は守鶴に取り憑かれた、哀れな殺人人人形のなりぞこないであ

ろう」

愚かな問いに、我愛羅は軽く眉を寄せた。
そして、ならば逆に問おう、と口を動かす。

「生まれ育った地を、慈しみ守って何が悪い？」

例え何度も殺されそうになっても、この里は己の故郷なのだ
と我愛羅は告げた。

それを聞いた老人達が口を閉じてしまうのを見てから、そのまま、
扉から室外へ出る。

意思表示はした。

後は老人達が決めることだ。

思いながら我愛羅が歩き出すと、廊下の向こうから子供が駆けて
来た。

見たことのある顔だ、と思いながら眺め、目の前まで来た少年に、
ああ、と声を漏らす。

数日前に我愛羅へ投石し、昨日共に里へと帰って来た、あの少年
だった。

彼の目的は我愛羅だったらしく、その幼い足が我愛羅の前で立ち
止まった。

手に持った何かを大事そうに抱えたまま、幼い目が我愛羅を見上
げる。

「どうした？」

訊ねると、少しはにかんでから、小さな手が我愛羅にその手で持
っていた物を差し出す。

それは、砂の里では珍しい小さな花を使った押し花だった。

我愛羅は僅かに微笑み、そっとそれを受け取る。

「ありがとう」

その言葉をあっさりと告げられるようになったのは、ごく最近だ。
嬉しそうに笑い、少年は駆けて去っていく。

多分昨日の礼のつもりなのだろうと、思いながら我愛羅は押し花
を見つめた。

そして、もう一度微笑んだ。

十
十
十

数日経ち。

砂の里に新たな『風影』が誕生した。

その力は強大であり、

幾度となく、里を守り続けた。

E
N
D

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5398p/>

我愛羅の話

2010年12月17日02時26分発行